



写真1:平城宮第一次大極殿院 1/100 模型
(1993年度製作、平城宮跡資料館)

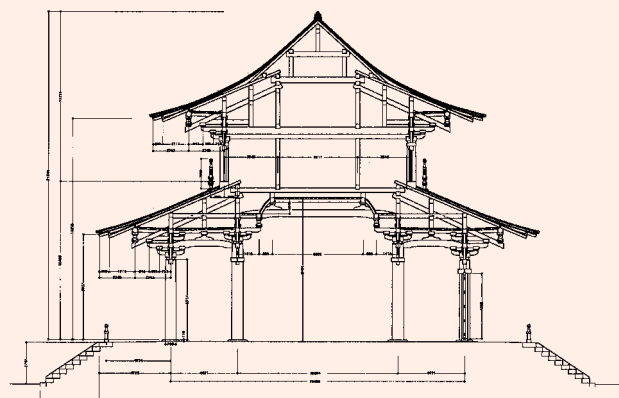


写真2:平城宮第一次大極殿 1/10 模型(左)、同梁間断面図(右、S=1/500)
(1995年度製作、遺構展示館)



写真3：平城宮第一次大極殿 1/5 構造模型
(1999年度製作、資材保管加工棟、撮影：(財)文化財建造物保存技術協会)

平城宮第一次大極殿の復元検討模型

平城宮跡では、現在、文化庁による第一次大極殿の復元事業が進められています。奈良国立文化財研究所(当時)は、その基本設計に至るまでの過程を担当してきました。基本設計の検討過程で作製してきたのが、これら3種類の模型です。最初に作製したのが、写真1の大極殿院全体の復元模型です。引き続き、大極殿本体の復元原案検討のために作製したのが、写真2の1/10模型です。この案は唐招提寺金堂の構造形式に二階部分を載せる形式で設計されています。身舎に大梁を架け、その上に天井を載せるところに最大の特徴が見られます。

この後、より具体的な基本設計案へと検討を進める過程で、構造についての考え方を大きく変更することになりました。写真3の1/5構造模型が、その改定復元案を反映したものです。1/10模型と比べて、とりわけ内部の構造に大きな変更が見られます。一階の柱を身舎、庇ともに同高に揃え、また、身舎内部から見える場所には大梁をかけず、長大な支輪で折り上げた天井を高い位置に張ります。いわば上方へ膨らむような内部空間を持つこの構造形式は、古代唯一の二階建金堂が残る法隆寺金堂を参照したものです。1/5ともなると、小住宅ほどの大きさがあり、模型といえども実施時同様に木材を正確に刻む必要が生じますし、部材同士の組み合わせ方や、デザイン、技法の詳細な検討が可能となります。ここでの検討と修正を重ねて、実施のための設計へととどり着きました。

復元建物が建つ過程では、膨大な検討が積み重ねられます。その過程を具体的なかたちとしてみせてくれるこれらの模型は、いま建ち上がりつつある大極殿本体と同等の価値を持っていると、私たちは考えています。

(文化遺産研究部 清水重敦)